

**国際共同研究事業スイスとの国際共同研究プログラム（JRPs）
事後評価結果**

研究代表者所属機関・部局・職・氏名 国際基督教大学・教養学部・准教授・李 勝勲

研究課題名：音声音韻及びピロマ字と元文字の不正書法：ヒマラヤの原住民話者への助力

評 価 結 果	
	S 想定以上に意義があった
	A 意義があった
O	B ある程度意義があった
	C ほとんど意義がなかった
所 見	
<p>本研究では、ベルン大学の研究グループと協働して、ヒマラヤ地方の危機言語の音声学的・音韻論的基礎研究を行い、更に諸言語の不正書法を開発し、ヒマラヤ原住民コミュニティに寄与することを目指した。このグループと共同研究が進んだことは評価できる。</p> <p>一方で、報告書で述べられているのはヒマラヤで使用されている複数の言語の音声・音韻に関わる問題だけであり、肝心の不正書法については研究成果が示されていない。タマン語（ネパール）では、適切な母語話者の協力が十分でなく、調査が初歩的な段階に留まっており、不正書法の開発まで進まなかったのは残念である。デンジョン語（インド）については、その音声カテゴリーが明らかになり、不正書法の開発に資することのできる知見が蓄積されている点は評価できる。また、タマン語の声調カテゴリーが明らかになった。不正書法のシステムで声調の表記は珍しいが、声調についての知見は、分節音レベルでの音声・音韻の研究に欠かせず、今後の研究の進展に重要な役割を果たすものと考えられる。</p> <p>国際協働については、言語調査のフィールドワークで採取した音声言語の分析が研究対象材料ということから、参加相手国及びデータ収集国との日程調整が困難であったことや、フィールドコミュニティに新しい研究者が入る権利の制約などの点では、計画をあらかじめ更に綿密に立てておく必要があった。しかしながら、共同研究実施体制や協力体制の困難さの中、若手研究者の研鑽機会の充実は図られていた。</p> <p>母語存続について現地のコミュニティの意向も考慮すべき課題であろう。当初の計画から達成できなかった点も明確に認識できており、不正書法の更なる継続的研究と報告が期待される場所である。</p>	